

観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



公益社団法人国際観光施設協会 副会長
能登半島被災地復興支援委員会 委員長

浅野 一行

能登半島被災地復興支援委員会は、当協会としては 2011 年の東日本大震災に続いて 2 度目の震災復興支援への取り組みです。東日本大震災の時は 3 度の現地視察を行ない、提言レポート「世界的に美しい陸中の八海湾の創造と広域環状観光圏の提案」をまとめ、遠野にて「陸中に世界的に美しい八海湾をつくる・どんな富や夢を地域にも



山崎麻織物工房



能登仁行和紙

たらずか」と題するシンポジウムを開催しました。この時は長期的な視点に立ち、三陸が将来目指すべき観光のあり方を軸にした復興計画を提案しました。それに対し今回の委員会はもう少し短期で、実質的かつ直接的な支援に繋がるような、そんな支援のお手伝いを目指してスタートを切りました。我々にどんな支援が可能か。また、我々にしかできない支援は何か。そう考え始めた時、ホスピタリティの考え方に基づく、フェーズフリー、木づかい、インテリアに生かす伝統工芸、エコ・小など、まさに現在我々が取り組んでいる研究テーマが復興支援の糸口になるかもしれない、との思いがありました。そこで、それらの研究メンバーを中心に、能登半島被災地復興支援委員会を立ち上げました。そして、さまざまな研究テーマに通じた総勢 13 名の視察団で、8 月 22 日から 2 泊 3 日で能登に入りました。

現地視察にあたっては復興支援が独りよがりの提案にならないように、まずは被災地の要望を知ることが必須と

考え、とにかく多くの方々の声を聞いてくることに徹底しました。日本観光振興協会さんからのご紹介をはじめ、幸いにもたくさんのご縁をいただき、2 日半で合計 19 カ所を訪問し、16 名の現地の方々の声を聞くことができました。被災後の厳しい状況下にも関わらず、ご対応いただきました訪問先の皆さまには深く感謝申し上げます。

そして現地視察を終え報告をまとめているその最中に、追い討ちをかけるような豪雨災害が起きてしまいました。28 河川で溢水等が発生し、10 カ所で土砂災害が起こり、ピーク時には 100 以上の集落が孤立したとされています。なんとも非情なダブル災害ですが、これはたまたま運悪く大きな災害が重なって大惨事になったものではありません。気候変動に起因する豪雨が日常化すれば、地震に限らずあらゆる災害と重なって起こる可能性が高まり、なるべくして「複合災害」となったものと考えるべきでしょう。すなわち我々は、今後は「複合災害」を前提に災害対策を考えなくてはならない、という現実を突きつけられたのです。このような認識の上で豪雨災害以前の視察報告をまとめても中途半端なものになりはしないか、委員会内で協議を重ねました。結果、今回の視察は震災の状況を伝えることよりも、壊滅的な被災から復興の糸口を探ることを主たる目的としたものであったことから、当初の予定通りこの時点での視察報告をまとめることにいたしました。

能登半島被災地復興支援 能登を伝える 創造的復興支援をめざして

公益社団法人国際観光施設協会 副会長
能登半島被災地復興支援委員会 委員長

浅野 一行



輪島塗師大工さん



輪島塗木地師蔵田さん



能登森林組合亀井さん



多田屋多田健太郎さん

さて、現地を訪れてまず驚いたことはとにかく復旧のスピードが遅いことでした。震災から既に7カ月半以上経っているにもかかわらず、現地の多くのエリアでは倒壊した建物が手つかずの状態、水道すら通っていない場所も少なくありません。公費による解体は8月末時点でまさにこれからと聞きます。半島という地理的要因、過疎化が進む地域という社会的要因、他にもさまざまなことが復旧の支障となっているようです。今回の豪雨被害を受けられた地域はさらに時間を戻されてしまいました。

次に我々が思い知らされたのは、地域によって被災の程度はさまざま上、暮らしや産業によって抱えている問題も異なり、画一的な復興支援では立ち行かないという現実でした。復旧すら進まないのに、復興計画を論じる段階に至っていないという現地の声が聞こえてくれば、とにかく避難所から人が返ってくることを望む声もあり、仮設工場の建設が遅れていることを嘆く声もあります。こちらも豪雨災害に

より、さらに被災地の状況は多様化し、より複雑な対応が求められる状況となっています。

しかしながら、そんな惨状の中にも我々視察団は将来の能登の「より良い里山里海をつくる」創造的復興の糸口となり得るような風土・営み・文化をしっかりと見てまいりました。点在する里はいずれも個性豊かで独自の魅力にあふれていました。ふるさとの原型のような穏やかな里山里海の風景、暮らしに溶け込み受け継がれてきた知恵と伝統の技、能登ヒバをはじめとする豊かな森林の恵み。これらかけがえない「能登の光」を、ホスピタリティ精神をもって再び磨く（生かす）ことで、再生される以上の価値を生み、創造的復興の礎にすることはできないでしょうか。壊滅的な被災から蘇るには、前の姿に戻すことでは、過疎化をはじめとする以前から抱えていた問題を乗り越えることはできません。変わることの恐れずに、地域の規模に相応しい、これからの時代の新しい価値観によって、昔からそこにあった能登を再構築

することが求められているのではないのでしょうか。

視察後、我々は幾度と協議を重ね、具体的な復興支援策を模索し始めています。国際競争力のある持続可能な観光交流空間の創造により、地域社会の発展に貢献する公益法人として、観光を切り口に協会会員が一丸となり、能登らしさを失うことなくこれまで以上に能登らしい輝きを放つ創造的復興のお手伝いをしたいと考えております。

追記 その後、当協会会員会社の協力を仰ぎ、「能登の光」と会員会社のコラボレーションにより、以下のような復興支援プロジェクトが立ち上がりしました。建築ハンドルメーカーによる輪島塗のドアハンドル、空間づくりを行なう会社が地元ボランティア団体に協力する古材レスキュー・廃材活用、ブラインドメーカーによる能登ヒバを使用した木製ブラインド、など10を超えるプロジェクトが進行しています。

シリーズ・能登を伝える、次回以降は、これらのプロジェクトの詳細をご紹介します。

連載

SERIES